

# 世代間交流活動にみる子どもの言葉や動きについて

～学生の観察記録より考察する～

吉津晶子\*

## Children's Words and Behavior as Seen in Intergenerational Exchange Activities : Considered from Records of Student Observation

This paper is the first step in a consideration of the fundamental question “Why is intergenerational exchange between children and the elderly necessary?”—a topic identified from a hands-on program for students in a course for childcare workers, in which they learned about practical interaction with children and the elderly simultaneously. It employs the methodology of dividing records of observation prepared by the students into those involving children and the students and those involving children, the elderly, and the students together, and using KH Coder to extract words from these. The students' records were reanalyzed using verbs that indicated children's actions, from lists showing the words' frequencies of appearance, as clues. The results showed that use of forms indicating demands or desires, such as *-shiyō* (“let's . . .”) or *-shitai* (“I want to . . .”), was pronounced between children and students. At the same time, the children's statements *oshietai* (“I want to teach . . .”) and *misetai* (“I want to show . . .”) provided a glimpse of an inherent concern for the elderly, suggesting the presence of altruistic feelings. On the other hand, between children and the elderly, altruistic actions such as those expressed by *sagasu* (“to search”), *mitsukeru* (“to find”), and *oshieru* (“to teach”) could be identified, as the children attempted to show things to the elderly participants.

### 1. はじめに

近年、少子高齢社会の進展に伴って、幼老統合・幼老複合ケアの必要性が示されようになった（広井；2000<sup>1)</sup>、多湖；2006<sup>2)</sup>）。その具体として、社会資源としての施設の複合化が進んできている。またその背景となる「地域共生ケア」という概念も確立されつつあり、概念と合わせて用語の整理も進んできている。地域共生白書（2003）<sup>3)</sup>によると、地域共生ケアは、“共生ケアの利用者とスタッフ”および“共生ケアの「場」と地域”という二つの関係性から成り立っているとされている。

石川（2005）<sup>4)</sup>によれば、「共生」や「ケア」に関して、「共生」という出発点から考えていくことがケアリングの原点であり、その必要性が説かれている。また広井（2000）<sup>5)</sup>は、ケアを生活モデルから捉え直し、「コミュニティケア」を「コミュニティにおけるケア care in community」ということだけに尽きるのではなく、「コミュニティ（づくり）のためのケア care for community」であると述べている。

2017年に厚生労働省が発出した「地域共生社会」の実現に向けて（当面の改革工程）<sup>\*1)</sup>において、介護・障害・福祉の領域を超えた支援の具体化としての「共生型サービス」について、ハード面とともに、人材養成も含めたソフト面に関する議論も

\* 熊本学園大学

進んできている。

このように「地域」「共生」「ケア」にかかわる考え方が変化する中で、保育者のあり方も、従来子どもだけに特化した立場にとどまらず、幅広く地域や地域の人々を対象とした福祉職としての立場が求められるようになってきている（金田；2010<sup>6)</sup>、上續・土永・岡崎；2004<sup>7)</sup>）。

このような社会的要請に対し、保育者養成の現場において、どのように保育者を養成していけばいいのかという検討をこれまで行ってきた。その検討の一つが本研究につながる実習教育である。その実習教育とは、2011年よりK大学社会福祉学部の保育者養成課程4年次の学生（表1）を対象に、沖縄県国頭村の複合福祉施設において実施している宿泊実習で、幼児と高齢者という世代間と同時にしかかわることを実践的に学ぶプログラム（クロス・トレーニング・プログラム：以下、CTP）である。このCTPでは、へき地保育所に対する理解と要介護高齢者を対象とした生活支援ハウスに対する理解を深めつつ、地域における幼老複合施設の役割についても学べるようにプログラムされている。更に、子どもと高齢者のかかわりを深めることができるような世代間交流プログラムの立案・実践を学生自身が行っている。

これらCTPにおける学生の学びを中心に、子ども

もと高齢者間の造形活動における支援事例（矢野・田爪・吉津；2013<sup>8)</sup>・2016<sup>9)</sup>）や自然観察活動における支援事例（溝邊・吉津；2013<sup>10)</sup>・2014<sup>11)</sup>）、学生の高齢者観の変化、プログラム全体の検討（吉津・溝邊；2012<sup>12)</sup>・2014<sup>13)</sup>）について報告を行ってきた。

これまでのCTPの研究を通して、次の2点が課題として導出された。1つ目が「世代間交流活動における保育者の間接的支援の力量形成」である。この課題に対しては、すでにTAZUME・YOSHIZU (2018)<sup>14)</sup>において着手し、研究進行中である。2つ目の課題が、本研究着手の動機となる「なぜ、子どもと高齢者との世代間交流が必要なのか」という、根本的な問いかけである。一般的に子どもと高齢者との世代間交流は、両者にとって望ましいものであると考えられているが、どのように良いのか具体的に示された研究は散見される程度である。しかもその研究は、高齢者の生きがいや健康に関する調査研究が殆どを占めている（例えば、藤原；2009<sup>15)</sup>、Fujiwara. et al., 2009<sup>16)</sup>）。一部、子どもの「社会性」育成の視点からの研究も見られるが（本田ら；2016)<sup>17)</sup>十分に検討されているとはいえない。そのため、子どもにとって世代間交流がどのような影響を与えるのかということをも明らかにして行くことが必要だと考えられる。

## 2. 本研究の目的

本研究では、子どもと高齢者が直接かかわり合うことを世代間交流と定義し、その具体的なプログラムを世代間交流活動と位置付ける。その上で、世代間交流活動における子どもと高齢者とのかかわりにおいて、子どもの言葉や動きを学生の参与観察の記録より明らかにし、世代間交流が子どもにとって「正の経験」となる可能性について考察したい。

## 3. 研究の対象および方法

本研究の分析対象は、2015年のCTPに参加した学生9名が作成した記録に記されたへき地保育所

表1：CTPの実施状況と参加者数

実施年度	参加者数	実施先
2011年	18	沖縄
2012年	9	沖縄
2013年	14	沖縄
2014年	10	沖縄
2015年	9	沖縄
2016年	10	熊本※
2017年	13	沖縄
2018年	11	沖縄
合計	94	

※熊本地震の影響により、2016年のみ熊本で実施

の園児11名とデイケアセンターの高齢者9名の言葉と動きである。

研究の方法は、学生が作成した世代間交流活動（フィールドビンゴ<sup>\*2</sup>）の記録を「子どもと学生」の場面と「子どもと高齢者と学生」の場面に分け、KH Coder（Version 3）<sup>\*3</sup>によって語の抽出を行なった。さらに出現回数を示す抽出語リストの中から、高齢者と学生に関連する動詞を除き、子どもの動きのみを示す動詞を場面ごとに分けた。これら抽出した動詞を手がかりとして、再度、学生の記録を精査した。

なお記録に関しては、事前に間接的支援（TAZUME・YOSHIZU, 2018）<sup>18</sup>）についての教示を学生に対して行い、子どもと高齢者間における交流を見守るという立ち位置を意識させている。

#### 4. 倫理的配慮

写真撮影および動画撮影、研究における使用については、すべて施設を通じて園児の家族および利用者の家族に伝えられ、文書にて同意を得ている。また、テキストデータとして入力するにあたり匿名性に配慮した。

### 5. 結果

#### (1) 語の抽出結果

学生の観察記録から語の抽出を行ったところ、「子どもと学生」の場面で37個の動詞、「子どもと高齢者と学生」の場面で38個の動詞が見られた。その内、高齢者および学生の動きを示す動詞を除き、子どもの動きのみを示す動詞だけを残し、出現回数で並び替えを行い、表2にまとめた。その結果、「子どもと学生」の場面では22個の動詞、「子どもと高齢者と学生」の場面では29個の動詞が確認できた。

これらの動詞の特徴としては、フィールドビンゴという活動の特性上、ビンゴカードに書かれたモノ（動植物、鉱物等）を「探し」に行く、「見つけ」に行くという活動に関係した行動（走る、見る、触る等）が両方の場面において出現回数の

表2：子どもの動きを示す動詞と出現回数

子どもと学生		子どもと高齢者と学生	
触る	11	行く	7
見つける	8	探す	7
行く	8	見る	6
探す	8	見つける	4
楽しむ	5	教える	3
見る	4	言う	3
言う	4	示す	3
走る	3	思う	2
知る	3	取る	2
教える	2	走る	2
見せる	2	知る	2
捕まえる	2	話す	2
遊ぶ	2	押す	1
やって来る	1	楽しむ	1
確かめる	1	喜ぶ	1
感じ取る	1	驚く	1
驚く	1	近づける	1
考える	1	繋ぐ	1
試す	1	見せる	1
逃がす	1	呼ぶ	1
伸ばす	1	行う	1
貼る	1	持つ	1
		置く	1
		入れる	1
		表す	1
		捕まえる	1
		歩く	1
		飽きる	1
		話し合う	1

上位を占めていた。また、「子どもと学生」の場面において「触る」の出現回数が最も多く、この理由としては、ビンゴカードの中にオジギソウの項目が多かったためであると考えられる。

#### (2) 抽出語リストを手がかりにして

表2の抽出語を手がかりとして、学生の記録を再度読み解いた。その中から以下に事例を2つ示すとともに、その他関連する抽出語を含む記録は表3にまとめた。2つの事例および表3は、同日

同時刻（2015年9月3日の午前および午後）の活動の記録である。

＜事例1：記録者 SK＞

【子どもと学生（午前）】

Tくんはオジギソウを初めて見た様子で、最初は触るのをためらっていたが、触って見せると、そっと手を伸ばしていた。どうして葉が閉じるのか不思議に思ったようで、虫を捕まえるためかとも考え、自分で指をしばらくの間入れているとどうなるのかを試していた。痛かったりすることもなく、くすぐったかった様子だ。Sくんは、バッタを探すことに夢中になって、たくさん捕まえていたが、弱ってきたことを感じ取り、逃がしてあげた。

【子どもと高齢者と学生（午後）】

TくんとSくんは、二人だけの時は、自分たちの行きたいところにどんどん走って行っていいけど、おばあちゃんと一緒になると、どこに行きたいか一緒に話し合ったり、ゆっくりと歩いていました。貝殻をおばあちゃんも見れるように取りに行ってくれと、おばあちゃんも喜んで一緒に見ることができました。子どもと高齢者が一緒にすることで、お互いのことを考え、感じながらいつもとは違う雰囲気フィールドビンゴができたと思います。（写真1）

＜事例2：記録者 KA＞

【子どもと学生（午前）】

フィールドビンゴでペアを組んだSちゃんは、オジギソウを初めて見たようでした。なんどもなんども触って楽しそうにしていました。「オジギソ



写真2：車いすを押すSちゃん

ウをおじいちゃんおばあちゃんに教えたい」Sちゃんは初めて見たオジギソウを何度も触り、葉が閉じるのを楽しんでいました。その後、他のビンゴを探しに行つて、全部埋まると、「もう一回あの草にさわりたい」と終わった後も触りに行っていました。毎日保育園に行つていても、知らないことはたくさんあると思います。新しい発見ができるきっかけになってよかったです。

【子どもと高齢者と学生（午後）】

Sちゃんは少し恥ずかしがっていて、手を繋いだりおしゃべりをしようとはなかなかしていませんでした。しかし、最後になると車いすを押そうとしたり、Nさんと話す様子が見られました。Sちゃんがフィールドビンゴを行った時と同じ項目を（世代間の）ビンゴに入れていたので、SちゃんがNさんに「こっちにあったよ」と教えていました。（写真2）

6. 考察

「子どもと学生」および「子どもと高齢者と学生」の場面における子どもの言葉や動きについて考察する。

(1) 「子どもと学生」の場面

子どもと学生の場面において、事例1および2で共通する経験は、「初めて見たオジギソウ」であり、触ると葉が閉じてしまうことに対して興味深く観察している姿が見られる。また、事例2のSちゃんは、触って楽しんだオジギソウのことを



写真1：何を探すかの相談

表3：学生の記録より（関連する抽出後を含む文章のみ）

記録者	子どもと学生	子どもと高齢者と学生
1. KA	「オジギソウをおじいちゃんおばあちゃんに <u>教えた</u> い」 「もう一回あの草に <u>触りたい</u> 」	車いすを <u>押そう</u> としたり、Nさんと話す様子が見られました。 SちゃんがNさんに「こっちにあったよ」と <u>教えて</u> いました。
2. SS	「おじぎするはっぱ」を <u>探す</u> ために <u>走って</u> <u>見つけ</u> に行った。 「もう一回おじぎするはっぱを <u>見に行こうよ!</u> 」と <u>言</u> って <u>走</u> っていき、今度はじっくり観察していた。	木の実を探していると、Aくんが先に <u>走</u> っていき、私とおばあに「ここにあるよー!」と <u>教</u> えてくれた。
3. SK	Tくんはオジギソウを初めて <u>見</u> た様子で、最初は <u>触</u> るのをためらっていたが、 <u>触</u> って見せると、そっと手を <u>伸</u> ばしていた。どうして葉が閉じるのか不思議に <u>思</u> ったようで、虫を捕まえるためかとも <u>考</u> え、自分で指をしばらくの間入れているとどうなるのかを <u>試</u> していた。 Sくんはバッタを <u>探</u> すことに夢中になって、たくさん捕まえていたが、弱ってきたことを感じ取り <u>逃</u> してあげた。	おばあちゃんと一緒になると、どこに行きたいか一 <u>緒</u> に <u>話</u> し <u>合</u> ったり、 <u>ゆ</u> っくりと <u>歩</u> いていました。  貝殻をおばあちゃんも見れるように <u>取</u> りに行くと、おばあちゃんも一 <u>緒</u> に <u>見</u> ることができました。
4. ME	赤だけではなく、白やピンクといった色々なお花を <u>探</u> してきてくれました。 バッタや蝶などがたくさんいて、おばあちゃんやおじいちゃんに <u>見</u> せてあげたいと言っていました。	花を <u>見</u> つけて高齢者に <u>見</u> せたり、虫を捕まえたり、はっぱを <u>と</u> ったりと、行動で表すことが多かった。
5. YW	オジギソウを <u>見</u> つけたEちゃん、 <u>触</u> れると閉じてしまうことが楽しいらしく、 <u>ず</u> っと <u>触</u> っていた。 他の子どもがやってくると、 <u>楽</u> しそうにオジギソウの <u>こ</u> とについて <u>話</u> し、みんなで <u>触</u> って遊んでいた。	恥ずかしがり屋な子のため、高齢者がたくさん話しかけると答えていた。
6. OH	自分の知っているもの、興味のあるものを <u>探</u> そうとしていた。	子どもは初めてすること、見るものに興味を示し、積極的に参加していましたが、途中で飽きてしまい、高齢者と一 <u>緒</u> に行動することができなくなりました。
7. HM	Sちゃんはしばらくオジギソウで <u>遊</u> ぶのに夢中になっていました。 オジギソウに似た草を <u>見</u> つけたら、 <u>走</u> って <u>そ</u> こまで <u>行</u> き、閉じるかどうか <u>触</u> っていました。  オジギソウをおじいちゃんたちと <u>探</u> したいと言っていた。	Sちゃんは、まずオジギソウから <u>探</u> しに行こうとしました。その時、Sちゃんは私たちを置いてオジギソウ <u>探</u> しに夢中になりました。 <u>見</u> つけると「あったよー!」と私たちを呼びます。
8. TR	Tくんは、付箋を <u>貼</u> ることをとても楽しんでいました。 Kちゃんと一緒にビンゴをしているときは、自分が付箋を貼りたいのを我慢して、Kちゃんに「 <u>貼</u> っていいよ」と <u>言</u> っていました。	高齢者とそれぞれに知っているものを <u>教</u> え <u>あ</u> ったりしていました。 リードして <u>見</u> つけにいく姿が見られた。
9. KN		花に顔を近づけて <u>匂</u> いをかぎ、楽しんでいた。 子どもは高齢者と初対面だったため、 <u>恥</u> ずかしがっていたが、積極的に <u>活</u> 動し、とても楽しくゲームができた。

高齢者に「教えたい」という言葉を学生に伝えており、自分が楽しく感じたことを高齢者にも感じて欲しいと思っていることがうかがえる。このように自分が見つけて楽しかったモノ、嬉しかったモノを高齢者に“伝えたい・教えたい”という言葉や行動を含めて、「～をしたい」という欲求の動きは、5例確認することができた(表3:記録者1, 2, 4, 6, 7)。

さらに、子どもの発した「教えたい」「見せたい」(表3:記録者1, 4)という言葉に内在する高齢者への思いについて考えると、「～したい」という欲求とともに高齢者を念頭に置いた利他的な心情ともうかがえる。

子どもと学生の場面においては、この他にも捕まえたバッタの状態を見て逃がす行動が見られたり、興味関心のあるモノを「見に行きたい」「触りたい」「見せたい」「探したい」といった言葉を子どもは学生に伝えている(表3:観察者1, 2, 4, 7)。さらに、これらの「～したい」という欲求に従って、走って見つけに行く、探しに行くといった行動に結びついているということがうかがえる。

また1例(表3:記録者8)ではあるが、「付箋を貼りたいのを我慢して」という記述が見られる。前述の「～したい」という欲求を行動に移した子どもたちと違い、ここでは“自己を抑え、他者を優先する”という姿が見られた。この違いの背景には、記録にも表れているように、子どもと学生が一对一のペアではなく、子ども二人と学生1人のグループであったという点が特徴的である。このことから他のペアとは違い、子ども同士の関係性が影響しているのではないかと推察されると共に、子どもが他児と学生という三者のかかわりの中で、自分の立ち位置と役割を意識しているのではないかと考えられる。

## (2) 「子どもと高齢者と学生」の場面

子どもと高齢者と学生の場面においても事例1および2で共通する子どもの姿が見られた。事例1では、歩けない高齢者の代わりにモノを取りに

いく姿と高齢者に歩調を合わせて行動する姿がみられ、事例2では、恥ずかしがって会話が少ない中でも高齢者の車いすを押す姿が見られた。このように“他者を観察して、自分が他者に添う”とする姿は表3の中でも5例確認することができた(表3:記録者1, 2, 3, 4, 7)。これらの姿は、自由に動けない高齢者に見せるために「探す」「見つける」「教える」といった行動からもうかがうことができ、子どもの自発性と利他性をそこから読み取ることができるのではないだろうか。

また、「一緒に話し合ったり、ゆっくりと歩く(表3:記録者3)」「一緒に見る(表3:記録者3)」や「知っているものを教えあったり(表3:記録者8)」等のような共同の表現も見られ、子どもと高齢者が共通の活動において相互的にかかわり合っている姿も確認することができる。

一方で、表3の中に見られるネガティブな要素についても触れておきたい。記録者6によって記録された「途中で飽きてしまい、高齢者と一緒に行動することができなくなりました」という記述である。最初は興味を持って積極的に参加していた姿からの変化を見ると、2つの可能性が考えられる。1つが活動の内容そのものに飽きてしまったこと、もう1つが高齢者とのかわりに飽きてしまったことである。記録の前後を確認しても、より具体的な記述がなかったため推測の域を出ることはできないが、子どもが何に飽きたのか、なぜ活動を続けられなかったのかということ进行を明らかにしていくことは、今後の検討課題の1つであると考える。

## 7. まとめ

以上の考察をもとに世代間交流が子どもにとって「正の経験」となり得るかという可能性についてまとめる。

「子どもと学生」の場面に見られた子どもの言葉や動きから確認されたのは、高齢者に“伝えたい・教えたい”とする子どもの姿と、「～したい」という活動そのものに対する積極的な子どもの姿

であった。また同時に、「～したい」という言葉に内在する高齢者への思いも垣間見え、そこに利他的な心情もうかがうことができた。さらに一部ではあるが、“自己を押さえ、他者を優先する”という姿も見られた。これらからは、高齢者の存在を念頭に置きつつも、子ども自身があそびを主導し、活動を展開していたと考えられる。

「子どもと高齢者と学生」の場面において見られた子どもの言葉や動きから確認されたのは、高齢者の代わりに動いたり、車いすを押したりといった“他者を観察して、他者に添う”という子どもの姿であった。つまり、子どもたちは世代間交流活動の中において、「触る」「見る」といった身体を通じた共通体験を通じて高齢者と相互的にかかわり、その文脈上で高齢者の心身の状態を把握し、一緒に活動するために必要な支援を自ら考え出し、それを実行したと考えられる。これら子どもの自発性や利他性に起因する行動が生じていることから考えると、世代間交流が子どもにとって「正の経験」となる可能性が示唆されたのではないだろうか。

## 8. 今後の課題

本研究ではフィールドビンゴの場面における子どもの姿のみを対象に分析・考察を進めてきた。そのため他の世代間交流活動（造形・生活等）における子どもの姿との比較が未着手である。今後は様々な場面における子どもの姿の比較検討も含めて実証的に示して行きたい。合わせて、本研究は学生の記録をもとに分析を行っているため、記録の書き方の偏在を避けるためにも事前指導を含めた十分な指導および指導内容の更なる検討を行っていききたい。最後に、本研究の今後の検討課題の1つとして前述した、高齢者と一緒に行動することができなくなってしまった子どもに関する事例研究も並行して行っていききたいと考えている。

## 註

※1 <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/>

0000150538.html (2018年9月1日参照)

## ※2 フィールドビンゴについて

ネイチャーゲーム（シェアリング・ネイチャー）におけるフィールドビンゴを援用し、学生が環境を調査した上で、子どもや高齢者の状況を観察し、自作したカードを使用している（写真3）。



写真3：ビンゴカード

## ※3 KH Coderについて

KH coderとは、樋口・川端によって開発されたテキスト型データの計量的な内容分析、もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトである。コード化作業をコンピューターによって自動化することで、コード化の基準に揺らぎや恣意性が生じないとされている。

## 付 記

本研究は、平成30年度熊本学園大学学術研究助成（代表：吉津晶子）の一部を受けて行われた。

## 参考文献

- 1) 広井良典『「老人とこども」統合ケア』中央法規出版, 2000, pp.2-19
- 2) 多湖光宗監修『幼老統合ケア』黎明書房, 2006
- 3) 第1回地域共生ホーム全国セミナーinとやま実行委員会『地域共生ケアとは何か 地域共生白書2003』筒井書房, 2003
- 4) 石川道男編著『ケアリングのとき』中央法規, 2005

- 5) 広井良典『ケア学 越境するケアへ』医学書院, 2000
- 6) 金田利子「保育者養成における世代間交流の位置と意義—家庭科における「中・高生と乳幼児とのふれ合い体験学習」から—」『世代間交流学の創造』あけび書房, 2010, pp.173-185
- 7) 上續宏道・土永典明・岡崎利治「保育所における高齢者との世代間交流に関する調査研究」, 桜花学園大学保育学部研究紀要 2, 2004, pp.89-100
- 8) 矢野真・田爪宏二・吉津晶子「保育者養成における子どもと高齢者をつなぐ造形活動：保育者をめざす学生の学びを中心に」, 日本世代間交流学会 3 (1), 2013, pp.67-76
- 9) 矢野真・田爪宏二・吉津晶子「保育者養成におけるコミュニケーションをテーマとした造形活動：造形活動による幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から」, 京都女子大学発達教育学部紀要 12, 2016, pp.155-162
- 10) 溝邊和成・吉津晶子「保育士養成課程学生の世代間交流実習における自然観察指導に関する学び：ネイチャーゲーム：フィールドビンゴの項目および実習記録の分析をもとに」, 日本世代間交流学会誌 3 (1), 2013, pp.77-86
- 11) 溝邊和成・吉津晶子「保育士養成課程学生を対象としたクロストレーニング 実習プログラムの修正：導入した高齢者向けネイチャーゲーム指導に見る学生の学び」, 日本世代間交流学会誌 4 (1), 2014, pp.25-37
- 12) 吉津晶子・溝邊和成・田爪宏二「保育者養成課程におけるクロス・トレーニングの試み：幼老統合施設における実習と参加学生の意識調査」, 日本世代間交流学会誌 2 (1), 2012, pp.69-78
- 13) 吉津晶子・溝邊和成「保育者養成課程における世代間交流指導のためのクロス・トレーニング・プログラムの試み—実習参加学生の質問紙調査からの考察—」, 教育実践学論集 15, 2014, pp.89-99
- 14) TAZUME, H. & YOSHIZU, M., “Indirect Support” in Intergenerational Communication, 2018 International OMEP conference in Prague, 2018, p.29
- 15) 藤原佳典「高齢者のプロダクティビティ’ productivity’ と世代間交流」『世代間交流効果』, 三学出版, 2009, pp.59-71
- 16) Fujiwara, Y., Sakuma, N., Ohba, H., Nishi, M., Lee, S., Watanabe, N., Kousa, Y., Yoshida, H., Fukaya, T., Yajima, S., Amano H., Kureta, Y., Ishii, K., Uchida, H., & Shinkai, S., REPRINTS: Effects of an Intergenerational Health Promotion Program for older Adults in Japan, Journal of Intergenerational Relationships 7 (1), The Haworth Press, Inc., 2009, pp.17-39
- 17) 本田恵子・岩谷由起『子どもと高齢者ふれあいのコツ ～介護施設や園ですぐできる～』, 学研ココファンホールディングス, 2016
- 18) TAZUME, H. & YOSHIZU, M., 前掲